

様々な学年の仲間と共に課題を解決し、自信をもって次の活動を求めようとする、愛顔あふれる子どもを育てる

愛媛県上浮穴郡久万高原町立柳谷小学校 小松 竜 大

1 テーマ設定の理由

上浮穴郡の子どもたちは豊かな自然環境の中で、伸び伸びと学習や運動に取り組んでいる。少子化が急速に進行しており、久万高原町内の小学校のほとんどが複式学級を有している。異学年合同体育を実施している中で、運動経験・技能・知識・体力・言語能力等、子どもの実態に様々な差が見られる。同一の単元において上下学年の指導内容や程度を「調整」しながら指導を行っているが、子どもの様々な差に配慮しながら、全員が運動の楽しさや喜びを味わえる授業を行うことは容易ではない。

そのため本郡では、以前より「異学年合同」を取組の視点として研究を進めてきた。令和4年度は「体づくり運動」領域の「多様な動きをつくる運動」に重点を置いて研究を進めた。運動のポイントや行い方、振り返りや気付きが一目でわかる「マスターブック」を作成し、郡内の全児童に配付、活用した。自己の課題解決に向けて、工夫して練習したり、過去の自分の取組を振り返ったりすることで成長を実感しながら、運動の習得につながった。1～6年生まで同じ種目に取り組むため、学年を超えて助言し合う姿も見られた。

しかし、「ゴール型」や「ネット型」の授業では、学年差・個人差の影響が大きく、運動を楽しむことのできない子どもがいることが課題として上がった。全員が運動の本質的な部分を楽しめているとは言いがたかった。その課題を解決すべく、令和5年度より研究領域を「ゴール型」に変更した。

以上のことを踏まえ、令和6年度は「様々な学年の仲間と共に課題を解決し、自信をもって次の活動を求めようとする、愛顔あふれる子ども」を育てたいと考え、テーマを設定した。

2 研究の視点

(1) 教材とつながる

ア 運動を多様に楽しむための工夫

「する・みる・支える・知る」の場面を充実させ、全員が運動を多様に楽しむことができるようにする。運動経験・生活経験に差がある中での授業となるため、単元の初めに、プロの試合の映像を見せるといった「知る」場面を設定することで「支える」役割の人がいるからスポーツができることや、観客として「みる」ことの楽しさに気付くことができるようにする。

イ 誰にとっても「やさしい」運動になるための教材・教具の工夫

下学年であることや運動が苦手であることが原因で活躍できなかつたり、逆に上学年であることや運動が得意であることが原因で遠慮したりすることのないように、ゲームの場やルール・教具を工夫することで、全学年の児童が運動の得意不得意にかかわらず「分かる」「できる」喜びを味わうことで運動のもつ本質的な面白さを感じられるようにする。

仮説 「する・見る・支える・知る」の場面を充実させたり、全学年に合った活動ができる教材・教具の工夫をしたりすれば、運動のもつ本質的な面白さを味わう愛顔あふれる子どもが育つだろう。

(2) 仲間とつながる

ア チーム編成の工夫

活発な話し合いができるよう、人間関係・運動能力等を見てチーム編成を工夫する。自力解決が難しい課題に対して、他の児童が手本を示したり、助言をしたりする機会を設け、協働的に課題解決できるようにする。

イ 話し合いを促すための教具の工夫

対話的な学びを活性化できる教具を充実させることで、仲間とともに「分かる」「できる」を感じられるようにする。

仮説 仲間との関わりに必要な感をもてるような時間を設定したり、仲間と話し合いたくなる教具を充実させたりすることで、仲間と共に「分かる」「できる」を喜び合う愛顔あふれる子どもが育つだろう。

(3) 自分とつながる

ア 自分の課題や次への目標等を子ども自身がつないでいくことができる自己評価の工夫

児童が自ら次の学習を新たに「つくっていく」ことができるように、一人一人が自分に合っためあてを設定できるワークシートを活用し、自分の成長を実感できるようにする。

イ 互いの成長やよい点を伝え合うことができる場の工夫

異学年の仲間との相互評価の場を設け、成長を実感し、自らの学びに自信をもつことができるようにする。

仮説 自己評価の場と異学年の仲間との相互評価の場を両方保障することで、自分のよさや成長を実感し、自信をもって次の活動へと挑戦する愛顔あふれる子どもが育つだろう。

3 研究の実際（父二峰小学校：3～6年 バasketボール・ポートボールの学習において）

(1) 教材とつながる

ア 運動を多様に楽しむための工夫

単元の初めにプロのBasketボールの試合の映像を視聴した。児童は映像を見たことで「相手チーム」「観客」「審判」「ベンチの選手」「監督」「掃除をする人」などスポーツを行うには様々な立場の人が必要であることを理解した。単元の終末に行ったゲームでは、選手、審判、得点係、タイムキーパーなどの役割を児童が自治的に行い、試合の運営をすることができた。「友達の動きをまねしてみたいと思った。」「審判がしっかり判定してくれた。」などの発言が上がり、多様な立場を経験したことで様々な視点でスポーツと関わるできるようになったと感じた。

イ 誰にとっても「やさしい運動」になるための教材・教具の工夫

学年の離れた全ての子どもにとって「やさしい運動」にするために、まずは子どもたちの楽しさ、難しさがどこに存在しているのかを整理した。単元の第1時にBasketボール、第2時にポートボールについて、それぞれルールを確認し、ゲームを行った。ゲームを行った後で、子どもたちに感想を聞き、それぞれのゲームの特徴を整理した（資料1）。

	楽しさ	難しさ・物足りなさ
Basketボール	・パスがうまくできた。 ・シュートが決まった。	・トラベリングが難しい。 ・シュートが入らない。 ・ボールがこわい。
ポートボール	・トラベリングを気にしなくていい。 ・ゴールを決めやすい。	・ゴールが決まりすぎてうれしさが半減する。

（資料1）子どもたちが感じたゲームの特徴

どちらのゲームをしても全員が思い切り楽しめるゲームになっていないため、単元の中盤に子どもたちの提案を基にしながら道具、場、ボーナス得点、トラベリングの判定など様々なルールの調整を行った。例えば道具という視点では、ボールをソフトバスケットボールに変えたり、通常のバスケットゴールの下に得点しやすいゴールを二つ作ったりした（資料2）。その際、難易度の高いゴールから順に、3点、2点、1点と振り分けた。これらの工夫により、運動の苦手な子どもでもゴールすることが可能となった。また、ボールを奪われないゾーンをどこに作れば面白いゲームになるのかを子どもたちが考え、自分たちで体育館の床にテープを貼った。子どもたちの思いを大切にしながら試行錯誤を重ね、子どもたち全員にとってより面白いゲームとなるよう、ルールの調整を重ねていくと、どの子も自分の力を発揮しながら思い切り楽しむ姿が見られるようになっていった。



(資料2) 中学年の子どもでも入れやすくしたゴール

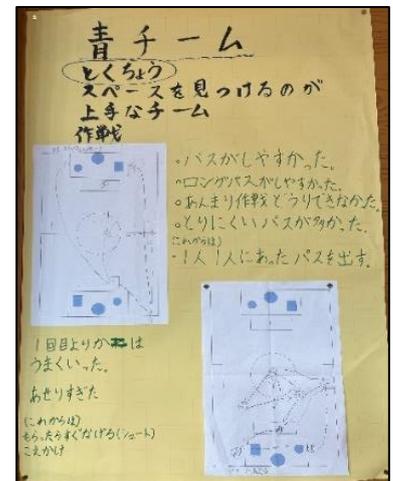
(1) 仲間とつながる

ア チーム編成の工夫

話し合いを活発に行えるようにチーム分けを工夫した。4人×3チームの分け方を「人間関係」「運動の苦手な子に優しく声かけができるか」「技能」に配慮しながら行った。これにより、手本を見せたり助言をしたりする機会が生まれ、チーム全体で協働的な課題解決が行えるようになった。

イ 話し合いを促すための教具の工夫

本単元では、対話的な学びを活性化させる教具として、タブレットと大きな作戦ボードを活用した。ゲームの様子をタブレットで撮影し、振り返りに活用すると、味方との距離感やパスのスピードの善し悪し、空きスペースがどこにあるかなど確認しやすかった。また、撮影にロイロノートを活用したことで、注目したいところに丸印や矢印など書き込んで伝えることができ、課題が共有しやすかった。そして、今まで自分が出ていない試合に興味を示さなかった児童が、タブレットで撮影することで真剣に良いプレーを探そうする姿も見られた。



(資料3) 大きな作戦ボード

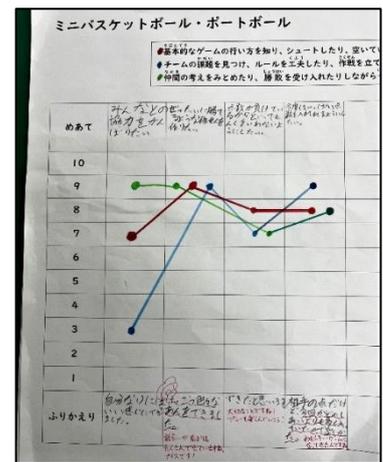
大きな作戦ボードも効果的に活用することができた（資料3）。初めにそれぞれのチームの特徴を子どもたちが考え、後にそのよさを生かすことのできる作戦をコート図に書き込み、模造紙に貼った。ゲームを終えると、その作戦の振り返りを記入することとした。いつも作戦ボードを体育館の壁面に貼っておくことで、自チームも他のチームの作戦も参考にでき、作戦に広がりが出ていった。

(1) 自分とつながる

ア 自分の課題や次への目標等を子ども自身がつないでいくことができる自己評価の工夫

単元を通して1枚のワークシートを活用した（資料4）。「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点について目指す姿を単元の始めに伝え、それらの達成度合いを折れ線グラフで自己評価するようにした。授業の導入で折れ線グラフが大きく変動した

部分を取り上げ、どうすれば全員が楽しく活動できるのか、よりよいゲームになるのかを全体で話し合い、次時に生かすことで自ら学習を「つくっていく」ことができるようにした。また、個々に応じた目標を設定できるように、授業後にワークシートへ振り返りをし、それを基に次時のめあてを立てるようにした。これらの工夫によって学年の大きく離れた子どもが同じ学習をする中でも、一人一人が自分に焦点を当て、できるようになった成長を実感できた。



イ 互いの成長やよい点を伝え合うことができる場の工夫

授業の振り返りの時間を十分に確保し、そこで他のチームや友達のおかげのところを自由に発表する時間を設けた。上学年の子どものプレーに対しては、「かっこよかった。」「自分もやってみたい。」など憧れのような発言が出る事が多く、下学年の子どもからすると上学年の姿が今後の自分の目標となっていた。それらの発言は、上学年の児童からすると大きな自信につながった。逆に、下学年の子どもに対しては、以前よりできるようになったことを称賛する発表が目立ち、自分では実感できていなかった部分の成長にも気付くことができた。また、単元の序盤では「〇〇さんのプレーがよかった。」「〇〇さんのシュートが上手だった。」など、個人を称賛する発表が多かったが、学習を重ねるにつれて他のチームのパスワークや作戦など、チーム全体に関する発表も増えていき、子どもたちの視点の広がりも感じられた。

(資料4) ワークシート

4 本年度の研究の成果と課題

(1) 教材とつながる

ア 成果

- 「知る」ことから始めると、児童が様々なスポーツとの関わり方に気付くことができた。
- ルール調整を重ね、運動が苦手な子どももよく動いてチームに貢献できるゲームになった。

イ 課題

- ゲーム作りや作戦に重点を置いた授業計画では、運動量がどうしても少なくなってしまう。運動量の確保という視点からも単元を構成していく必要がある。

(2) 仲間とつながる

ア 成果

- 作戦ボードをいつでも誰でも確認できるようにしたことで、協働的な課題解決につながった。
- タブレットでの撮影は、課題の具体化と共有化に加え、見るという役割の理解に有効だった。

イ 課題

- タブレットで撮影をし、動画を見て確認すると運動量が少なくなった。4(1)イと同様、運動量の確保が課題である。

(3) 自分とつながる

ア 成果

- 一人一人のめあての設定や折れ線グラフでの自己評価をできるようにしたワークシートは、異学年の中でも個に目を向け、子どもが自分の成長を実感することに役立った。

イ 課題

- ワークシートの振り返りの視点が多かったため時間がかかった。視点の精選が必要である。

(参考文献)

DAZN Japan. “【日本×フィンランド | ハイライト】FIBA バスケットボールワールドカップ 2023”. YOUTUBE. 2023/08/28. <https://www.youtube.com/watch?v=ODE0n591PZQ>, (参照 2023-10-10).